

平成8年(1996年)5月10日発行

特別リポート

ネパール仏教僧院復原計画

よみがえったイ・バハ・パヒ

報告 黒津 高行(建築学科助教授)

前日の雷雨と大風が、カトマンズ盆地のほこりや汚れをすっかり洗い流してくれていた。一九九六年三月三日、どこまでも澄み渡った青空のもとで、イ・バハ・パヒ修復工事竣工式は、この式典は、日本工業大学ネパール建築調査団とネパール政府考古局の共同主催の、このかたちで運営され、当日は百名を超える関係者が出席した。



写真上=立ち会ひ人の波多野教授を間に引き渡し証書に署名する大川理事長とシュレスタ考古局長。写真左=見事によみがえったイ・バハ・パヒの中庭正面。写真右下=復原工事前の荒れ果てていた同僧院の中庭正面(1981年11月撮影)。

写真提供/ネパール建築調査団



吉田大使を現場で案内する渡辺勝彦教授。

来賓では、在ネパール日本大使・同公使・参事官、在ネパール文化大使、ネパール政府文化大臣・同副大臣・同次官、国家計画委員会委員、パタン市長、地元の仏教協会、アールサ小中学校長らがおおいでくださり、また、この日のために日本から駆け付けてくれた藤岡通夫先生のご家族が参列して下さった。

正午前、シャキヤ僧侶による宗教儀式が進行する中、来賓の方々がおおいで式典会場へお見えになった。日本から持参した芳名帳にご署名いただいた後に、パンフレットが配付された。各々の所定の席に案内され、門前には来客のための水桶を設けられ、中庭の四方を囲む基壇上には季節の花々が並べられた。この会場で、ネパールの伝統的な竣工式の慣例に倣い、各種の祝いの品々が用意された。神様の前には燈明とともに、米・菓子・花・果物などの供物やマンダラ砂絵、建物の正面の欄干には五色の輪からなる五色の傘蓋、そこから中庭へ向けて下がる白帯、建物背面の軒先からは鮮やかなサリが数本垂らされた。さらに、両国の国旗や仏教徒の五色の旗とともに、本学の校旗も掲げ、祝いの場にふさわしい厳粛な雰囲気を出していた。

今回の式典は、端正に蘇ったネパール仏教僧院建築の、神聖な中庭空間で厳かに開始された。オープニングの言葉は、プロジェクトの代表である渡辺勝彦教授の「とにかく、うれしいの一語です」で始まった。日本語、ネパール語、英語を併用して、歓迎の言葉と復原計画の概要が説明された。続いて日本の文化庁長官からの祝辞を波多野純教授が代読した。

次に、ネパール側の主催者を代表して考古局長が、主賓の方々の参列に対する感謝と、日本工業大学の修復援助・技術協力に対する謝辞を、さらに計画の説明を英語で述べられた。続いて日本側から、大川理事長が日本語とネパール語でお礼を述べた。少し長くなるが、理事長の言葉を以下に記したい。

「皆さん、このイ・バハ・パヒの蘇った空間の素晴らしさはいかがでしょうか。ここに、文化大臣バハドゥール・ケーシー様、吉田大使様をはじめ、各国大使の方々がおおいで下さいました。パタン市長ベカラトナ・シャキヤ様、ネパール政府の高官、日本大使館の高官もご列席くださり、ありがとうございます。そして、現場の皆様、本当にご苦労さまでございました。ここにこうしてイ・バハ・パヒの修復工事が竣工し、地元の皆さんにお返しできたことを大変喜んでおります。

日本工業大学では、体験

あたりに、両国の共同作業を象徴するものであった。この頃から式典の雰囲気は次第に和やかなものになっていった。

続いて、建物の引渡式が行なわれた。まず、大川陽康理事長と考古局長カドゥ・ガマン・シュレスタの両氏が引継書に署名し、これをパタン市長ベカラトナ・シャキヤ氏へ手渡した。また、伝統的な出入口の扉錠を模した金色の鍵が、理事長から考古局長へ、考古局長から市長へ、そしてアールサ小中学校長ビシヌナラヤン・チトラカル氏へ手渡された。

重信様からは、「この事業は、日本政府のいわゆる開発援助予算によって行なわれたものではなく、全くの日本の民間人グループ、優れた研究者グループによって行なわれたものであり、一語です。」

ネパールの文化大臣、在ネパール日本大使、各省・各大使館の高官、地元の人々が出迎えて下さった。この研究を支えて下さった藤岡通夫先生のご家族もお見え下さいました。

このプロジェクトの経緯を簡単に記しておきます。

イ・バハ・パヒは、一四二七年に創立された、カトマンズ盆地の伝統的建築のうちで最も古い僧院の一つです。私たちは、一九七八年以来、六度現地に調査しました。その成果をもとに、この僧院を修復の対象として選んで一九八九年に復原計画をネパール王国政府考古局に提案し、共同で修復しました。

現地の人・技術をもとに、建築の本質を失わず、今後人々の生活の場となるよう、努めました。

第一期(一九九〇〜一九九三)は、南棟、塔のある西棟について、主に木の弱った箇所を修理し、すでに失われていた部分を補い、工費費用は、寄付をもとに日本工業大学が負担しました。

黒津・波多野と三人で交代で現地に詰め、材木を一本ずつ買い集め、工場に直談判をしてれんがを焼き、ほぼ直営に近い形で工事を進めました。

史から大学の調査団による修復工事バネル展示の紹介とともに、式典の終了が告げられた。

昼食に入ると、ネパールの伝統的な踊りと音楽が披露された。文殊菩薩など仏教僧院にふさわしい出し物や盆地内の民族舞踊が、神前で演じられた。すでに会場は、神聖で厳かな式典の空気から、皆が歓談する和気藹々としたものに変わっていた。

十四時すぎ、予定どおり竣工式のパネル展示を全て終了し、主催者たちは来賓の一人一人を門前で見送り、感謝を述べた。その後、職

次に、ネパール側の主催者を代表して考古局長が、主賓の方々の参列に対する感謝と、日本工業大学の修復援助・技術協力に対する謝辞を、さらに計画の説明を英語で述べられた。続いて日本側から、大川理事長が日本語とネパール語でお礼を述べた。少し長くなるが、理事長の言葉を以下に記したい。

「皆さん、このイ・バハ・パヒの蘇った空間の素晴らしさはいかがでしょうか。ここに、文化大臣バハドゥール・ケーシー様、吉田大使様をはじめ、各国大使の方々がおおいで下さいました。パタン市長ベカラトナ・シャキヤ様、ネパール政府の高官、日本大使館の高官もご列席くださり、ありがとうございます。そして、現場の皆様、本当にご苦労さまでございました。ここにこうしてイ・バハ・パヒの修復工事が竣工し、地元の皆さんにお返しできたことを大変喜んでおります。

日本工業大学では、体験

あたりに、両国の共同作業を象徴するものであった。この頃から式典の雰囲気は次第に和やかなものになっていった。

続いて、建物の引渡式が行なわれた。まず、大川陽康理事長と考古局長カドゥ・ガマン・シュレスタの両氏が引継書に署名し、これをパタン市長ベカラトナ・シャキヤ氏へ手渡した。また、伝統的な出入口の扉錠を模した金色の鍵が、理事長から考古局長へ、考古局長から市長へ、そしてアールサ小中学校長ビシヌナラヤン・チトラカル氏へ手渡された。

重信様からは、「この事業は、日本政府のいわゆる開発援助予算によって行なわれたものではなく、全くの日本の民間人グループ、優れた研究者グループによって行なわれたものであり、一語です。」

ネパールの文化大臣、在ネパール日本大使、各省・各大使館の高官、地元の人々が出迎えて下さった。この研究を支えて下さった藤岡通夫先生のご家族もお見え下さいました。

このプロジェクトの経緯を簡単に記しておきます。

イ・バハ・パヒは、一四二七年に創立された、カトマンズ盆地の伝統的建築のうちで最も古い僧院の一つです。私たちは、一九七八年以来、六度現地に調査しました。その成果をもとに、この僧院を修復の対象として選んで一九八九年に復原計画をネパール王国政府考古局に提案し、共同で修復しました。

現地の人・技術をもとに、建築の本質を失わず、今後人々の生活の場となるよう、努めました。

第一期(一九九〇〜一九九三)は、南棟、塔のある西棟について、主に木の弱った箇所を修理し、すでに失われていた部分を補い、工費費用は、寄付をもとに日本工業大学が負担しました。

黒津・波多野と三人で交代で現地に詰め、材木を一本ずつ買い集め、工場に直談判をしてれんがを焼き、ほぼ直営に近い形で工事を進めました。

史から大学の調査団による修復工事バネル展示の紹介とともに、式典の終了が告げられた。

昼食に入ると、ネパールの伝統的な踊りと音楽が披露された。文殊菩薩など仏教僧院にふさわしい出し物や盆地内の民族舞踊が、神前で演じられた。すでに会場は、神聖で厳かな式典の空気から、皆が歓談する和気藹々としたものに変わっていた。

十四時すぎ、予定どおり竣工式のパネル展示を全て終了し、主催者たちは来賓の一人一人を門前で見送り、感謝を述べた。その後、職

竣工式を終えて



渡辺 勝彦
(建築学科教授)

進めました。

今後、この建築は、従来のように学校として、宗教行事の場として、そして伝統的な文化の展示空間に使われることを、ネパールの皆さんが合意しています。

イ・バハ・パヒは思っていたように素晴らしい建築です。今後、文化財として大事に、しかも積極的に使われるよう願っています。

吉田大使は「日本人の一人として、また本地におきまして日本を代表して仕事をしたい」といいたしまして、この修復作業がこのように立派に完成いたしましたことに、大きな喜びとまた誇りを感じております。と祝辞を述べられました。

この仕事が出来たのは、日本工業大学の皆さまのご支援のおかげです。とくに、ここまで一八年間、折々に賜った理事長・学長・プロジェクトにご教示を下さった先生方の暖かい励ましが、蘇ってきます。

こうした環境の下で竣工にこぎつけられたことを心から喜んでおります。厚くお礼申し上げます。

人や近所の住人に食事を振舞い、労を労った。

竣工式では警備上の問題もなく、順調に事が運び、ほぼ成功裏であったと思われまふ。まったく手作りの竣工式でしたが、最後まで中座される方はおらず、日本大使や文化大臣をはじめ、熱心にバネル展示や現場の修復箇所などをご覧いただいたことは誠に光栄でした。

最後に、竣工式開催にあたり、いろいろご協力を賜った日本およびネパールの関係者の方々に心からお礼申し上げます。

図表1 ●平成7・8年度入試結果

		推薦A		推薦B		一般入試		その他	
		入学者	受験者	合格者	倍率	受験者	合格者	倍率	入学者
機械工学科	7年度	130	302	59	5.1	199	44	4.5	72
	8年度	137	243	72	3.4	236	75	3.1	37
電気電子工学科	7年度	153	343	78	4.4	184	40	4.6	60
	8年度	149	226	62	3.7	205	40	5.1	56
建築学科	7年度	133	242	52	4.7	417	45	9.3	48
	8年度	131	178	36	4.9	439	50	8.8	67
システム工学科	7年度	132	294	96	3.1	151	57	2.7	33
	8年度	105	162	55	2.9	147	62	2.4	40
情報工学科	7年度	98	29	3.4	128	38	3.8	19	19
	8年度	34	177	78	2.3	337	48	7.0	29

図表2 ●推薦A指定枠 平成8年度→9年度

	機械	電気	建築	システム	情報	全学科	合計
平成8年度	142	155	142	110	37	13	599
平成9年度	130	128	129	97	33	8	525
増減	-12	-27	-13	-13	-4	-5	-74



図表3 ●取得者の多かった資格上位10
(平成8年度推薦B合格者)

	機械	電気	建築	システム	情報
計算技術検定3級	122	114	101	99	61
計算技術検定2級	34	21	10	20	18
危険物取扱者乙種第4類	107	64	35	54	25
危険物取扱者丙種	37	26	12	18	12
危険物取扱者乙種第5類	27	10	4	5	7
危険物取扱者乙種第3種	19	12	3	6	9
情報技術検定3級	91	66	59	41	12
情報技術検定2級	60	85	22	90	69
情報技術検定1級	4	2	1	4	21
第2種情報処理技術者	--	--	--	--	16
基礎製図検定	37	--	2	16	1
製図検定	35	--	--	7	2
トレース技能検定3級	6	--	10	2	--
機械製図検定	32	--	--	7	3
アマチュア無線技士	8	26	--	8	8
ラジオ・音響技能検定4級	--	17	--	6	2
実用英語技能検定4級	--	3	11	10	6
実用英語技能検定3級	3	8	9	9	12
工業英語能力検定4級	7	--	9	5	9
ポケコン検定3級	21	--	7	18	11
デジタル技術検定3級	--	1	--	4	18
ボイラー技士2級	--	2	--	13	6
電気工事士第2種	6	87	--	26	10

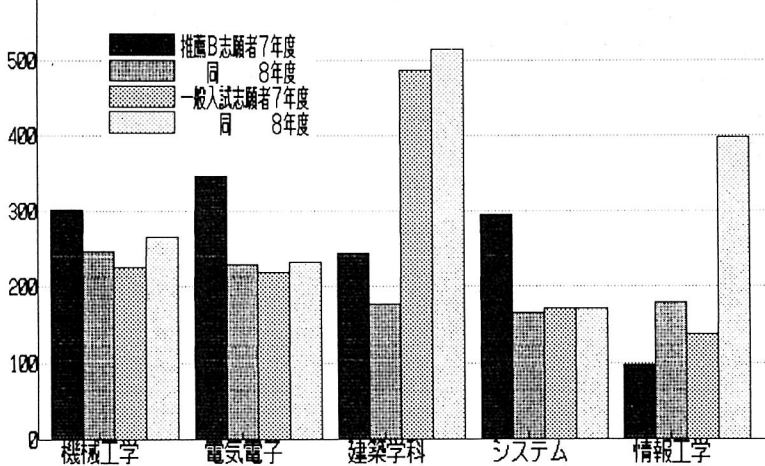


写真上・下=平成8年度入学式

定枠を設け、工業高校卒業生の大学進学への脈絡をつけることで、工業高校の活性化への一助となることのできるのではないかと、この期待を込めて平成七年度の入学式改革の際に初めて導入されたものである。

実施初年度の指定枠は過去の入学者実績に基づいて算定した。平成七年度のA方式による入学者が二年次に進級したこの春、当初の

図表4 ●平成7・8年度入試志願者数



き、それ以下であればその分の指定枠を削減するという方針で臨んだ。

同時に推薦B方式入学者全員についても成績を追跡調査した。

その結果、機械工学科に一名、電気電子工学科に三名、情報工学科に一名、新たに指定枠が生まれた。

推薦B方式(面接)

推薦B方式は成績概評B(3・5)以上を前提とし、①目的意識がしっかりしており、学習意欲が旺盛で、大学での学習にもしかるべく対応できると見込まれる者、②なんらかの特長・特技を有しており、大学での学習にも対応できると見込まれる者、が高等学校長の推薦により応募できる制度で、面接および書類審査により選考を行うものである。

このB方式はA方式の指定枠を持たない高校の志願者、あるいは指定枠に入ることができなかった志願者が出願できる制度である。さらに、B方式による入学者にはA方式による入学者とは少し異なる資質を持った人物像を期待している。

A方式による入学者としては総合的な力量を持ったいわゆる「優等生的」な人物像が期待される。仮にその資質に関する幾つかの項目を適宜に想定してリーダーチャートを作成したとすれば、凹凸の少ない、均整のとれた図形が描かれるにちがいない。

対してB方式の志願者には求めているのは秀でた「特長・特技」を持ち、自らが学ぶ分野に対して「情熱的」で、人間的にはすくなく「個性」であることなどである。

図表4に見る通り、八年度は受験者が大きく減少した。隔年現象ということもあろうが、前年度の厳しい合格率に嫌気がさされたものと思われる。九年度はA方式の指定枠の減少分をB方式で募集するので、九年度B方式はかなり易化するが予想される。

一般入試

本学の一般入試はA方式とB方式の二方式制を採用している。A方式は主に普通科生のために、またB方式は工業科を履修している専門高校生のために、試験科目を配している。A方式・B方式のどちらで受験するかは出願時に選択することになる。

冒頭に述べた一般入試志願者の増加率二六％のうちB方式の増加率は七％。ほとんどがA方式の増加になる。

平成八年度一般入試の全レベルの趨勢として①理工系統の人数が高かった、特に景気の動向と関連して工学部に志願者が集まった。②東京周辺の大学は志願者減の幅が少なく、志願者増の大学もあった。③現行教育課程最後の入試で併願校が増えた、等があげられる。

平成9年度 推薦入学について



日本工業大学 教務課入試係
TEL 0480-33-7507
FAX 0480-33-7527

【推薦入学A方式】

過去の入学実績(入学後の成績を重視)を勘案して推薦依頼生徒数を決定し優秀な生徒諸君をご推薦いただく指定校制(学科指定)です。

出願期間	平成8年10月1日(火)～10月7日(月)
合格発表	平成8年10月20日(日)

【推薦入学B方式】

成績概評B以上を前提条件とし、特長・特技をもった生徒諸君を広く推薦していただきます。

第一回	出願期間	平成8年9月2日(月)～9月30日(月)
	面接	平成8年9月29日(日) [大学] 10月1日(火) [仙台] 10月2日(水) [新潟] 10月3日(木) [岡山] 10月4日(金) [松本] 10月6日(日) [大学] 10月7日(月) [名古屋] 10月8日(火) [静岡]
	合格発表	平成8年10月20日(日)

*面接において、地方会場(仙台、新潟、岡山、松本、名古屋、静岡)および9月29日の大学会場を希望する場合は、9月20日(金)までに出席してください。

第二回	出願期間	平成8年11月25日(月)～12月6日(金)
	面接	平成8年12月11日(水)
	合格発表日	平成8年12月22日(日)

◎学園創立九〇周年に向けて……

わが国初の飛行機づくりへの挑戦

前号で記したように、学園は開学地の東京市小石川校舎（明治四〇年）から神田錦町の校舎（同四十四年）へと移転。明治天皇の崩御によって、時代は新たな大正期を迎えるのだが、その前に、ぜひとも特筆しておかなければならぬ事柄がある。

それは明治四十三年、わが国最初の飛行機が陸軍の日野熊蔵大尉の指導のもとに、本校の実習工場において組み立てられ、青山練兵場（現明治神宮外苑）で試験飛行が行われた歴史的快挙である。

残念ながら、このテスト飛行は成功に至らなかった。したがって、快挙と言うには、少く抵抗感もなくはないが、高度な技術を要する飛行機作りに果敢に挑戦したという、その心組は、まさに快挙といえるべき事柄だった。

ちなみに、わが国において航空機の学術・技術の取り組みが始まったのは明治四十二年、陸海軍および文部省（東大）合同の「臨時軍用気球研究会」が設けられ

②チャレンジ精神

たところからで、わが国に飛行機がはいったのはその翌年操縦術習得のため派遣された陸軍の徳川、日野両大尉がそれぞれフランスおよびドイツから持ち帰った飛行機で初の飛行を行なったときだった（『日本産業百年史（上）』有沢広巳監修／日経新書）。

また『日本の技術一〇〇年』へ「航空機・自動車」（筑摩書房）によれば、わが国の航空産業の始まりは「一九〇九年に設立された臨時軍用気球研究会は一九一一年に研究会式1号、2号機を、また陸軍は一九一三年に砲兵工廠でルノー51kW 発動機（エンジン）を、それぞれ製造し」とある。したがって、日本の航空機の草創期に呼応するかのように、飛行機づくりに挑戦した本学園の先輩たちのチャレンジ精神が、いかに意義深いものだったか、想像に難くない。

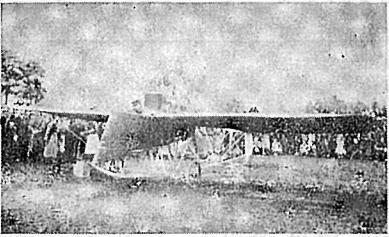
このついでに言えば、さきの日野大尉が、代々木練兵場（現国立代々木体育館周辺）でグラデー式単葉飛行機で初めて飛行に成功（高度一〇〇呎・距離六〇呎）するのは、わが東京工科大学が製作に

で試用に入り、さらに十一月には、久原鋳業所日立鋳山工作課長の小平浪平氏によって、茨城県日立町に電気機械製作工場（現日立製作所）が誕生をみたばかり、という風で、近代化の基盤がようやく整いはじめた時期であった。

したがって、飛行機作りといっても、当時は部品をフランスやイギリスからまとめて輸入し、いわゆる「お雇い外国人技術者」の指導によって組み立てる、というあんばいだった。わが東京工科大学が、どのように飛行機作りを行ったか詳しい記録が残っていないので不明であるが、以上のような経緯から推して、多分おもに輸入された部品に基づき、実習工場を組み立てが行われたものと思われる。参考までに言い添えておけば、わが国の航空機産業が、文字通り自立をみるのは、昭和七年（一九三二）に策定された海軍の「航空技術自立計画」に基づいて開発が進められ、同十二年に試作命令の出た三菱航空機（現三菱重工）製作による十二艦戦（零戦）で、それは「航空技術史からみても、飛躍と試練の大きな曲がり角で、生み出された飛行機（『零式戦闘機』柳田邦男／文春文庫）によってだった。

無論その間、さきの三菱航空機をはじめ、中島飛行機（現富士重工）や川西航空機（新明和鋳業）などによって、多くの航空機が生産されては来た。が、それらのエンジンや機体設計技術は、概ね外国人によるものか外国機の模倣で、純然たる国産技術に基づくものではなかった。しかし前述の「航空技術自立計画」の推進で、様相は一変。その代表的な成果である名機「零戦」の登場で、わが国は一躍、世界の航空技術のトップになったのだ。

大学の母体である「東工学園八十年史」に掲載の試作機と日野大尉。



わが国最初の飛行機と日野大尉



飛行機づくりの挑戦が、如何に価値あるものだったかがわかる。

目を転じて、その年の日本のエンジニアリングの世界を見やると、六月に（新）新潟鉄工が設立。十月には通信省が、ジーメン方式の印刷電信機を東京・横浜間

がんばれ！4年生

就職ガイダンス実施

就職に対して真剣かつ熱心で、学科ごとに実施された就職ガイダンス会場はいずれも盛況で、学生の熱気に溢れた。ちなみに就職ガイダンスへの出席率は九十％を超えた。

平成八年度の就職ガイダンスが四月に実施された。日本経済は、ゆるやかに景気回復に向かっているという新開等報道されている。しかし、本格的な景気回復にはまだ遠く、企業側の採用姿勢は今年度も厳しいと予想される。

このような就職環境下にある四年生は、例年になく「がんばれ！四年生」

心地よい汗を流そう

体育祭実行委員長 栗山 耕一

今年で体育祭は第二十九回を迎え、私はいま体育祭実行委員長として責任の重さを痛感しています。今年の体育祭のメインテーマは「Burning Heart」と決まり、燃える心で全力でぶつかって行こうと思っています。

さて、今年の体育祭では趣向を凝らした種目を多数プログラムに散りばめて新入生の皆さんに気軽に競技に参加して頂くように配慮してありますので奮って参加して頂くことを希望しています。また、教職員も熱意で絶対の体育祭日和に致しますので、五月晴れの下の、心地よい汗を流しましょう。

「円高」下の中小工場の実態調査成る！

工業地理学研究室の取り組み

「円高」下において苦闘をつづける中小企業の現状と今後を考察するうえで欠かせない貴重な調査報告書が、この三月、工業地理学研究室（竹内淳彦教授）の手でまとめられた。

期間は、一ドルが八〇円台を推移するという、あの空に影を及ぼしているかを前回の円高現象を来した九五、年八月下旬から九月下旬で、調査スタッフは、猛暑の置る大田区と並んで一大工業集積地をなし、しかも格に、一年生約五〇名が参画した。



現在も調査継続中の学生たち

る調査が行われた。報告書は、そのデータに基づき、まちづくりと一体化した九項目の産業振興策を提言しているが、その根幹は「葛飾の地域特性である心温まる職住一体のコミュニティ」の温存（竹内教授）にある。

STUDENT face '96

小林健一君は、本学のシステム工学科を卒業し大学院に進学した学生だ。

一見すると堅物のように感じられるが、彼の趣味はマイコンプログラミング、作曲、楽器の演奏、オランダの版画家エッシャーやシュールレアリスムに立ち詩的な独自の幻想世界を描いたベルギーの画家マグリットなどの絵画にも興味を示す感性豊かな青年である。



システム工学科 18期生 小林 健一君 桐生工業高校出身

■地場の織物産業に革新を

果たすことになる。

学部在学中はひたすら趣味に没頭したようだが、彼生に無くてはならない部品品の製造業を営んでいる。他の学生と異なる点がある。それは、通学の車中で英文を辞書と首つ引きで読んでいるが、最近では繊維産業界もアジア諸国の製品に国内市場を奪われ金銭製造

に携わる人も減少した。最れたのであろう。豊かな美的感覚や音感、四季折々に彩りを変える高級呉服の装いに熱い視線をもって注目が集まる中、物心がつくころから聴いていた軽快な八木節のリズムが彼の音感を鋭くした。これらをベースに粘り強く研究を続けていけば立派な研究論文を仕上げるであろう。

ところで、彼は将来研究職に就くことを希望しているが、所謂研究者タイプでない型破りな研究者を志向している。残念なことではあるが、彼は家業を次ぐ意思はないようだ。しかし、伝統工芸として伝承されてきた桐生織の世界に最先端のコンピュータ技術を導入して桐生織に技術革新を起こそうとする意思はあるようだ。彼の夢が今後の研究を通してどのような形で実現できるのか楽しみである。

助教授の下でVODを利用した学習支援システムの構築というテーマで研究を始めていた。この研究ではプログラミング能力、画像、音楽などの専門的知識が要求されるが、小林君には既に飛躍することを期待している。（直村）

カナダに学術研究 交流拠点を開設!!

来年の学園創立九〇周年にちなんで、カナダのアルバータ州に研修施設が開設(日時はまだ未定)される。

所在地は、州都カルガリーから車でおよそ二時間半のクロウズネストパスという町(人口六千五百) ながら、当所はロッキー山脈の東側に位置し、アメリカのモンタナ州に隣接する、まことに美しい自然環境に恵まれている。



写真上=豊かな自然環境の中にある元裁判所の研修施設。左下=格調の趣が色濃く漂うファサード。



P. B R A K E Yと公共事業局との共同設計。その後一九三二年にアルバータ州警察部隊が解散した折りに、兵舎部分が事務空間に変えられたもの。そして本学園が、それを譲り受けたというわけだ。

施設使用の細目は、まだ決まっていないが、期待される機能は、以下の通り。

①長期留学プログラムの中心施設

②学園関係者の学術交流拠点

③大学院生などの短期研修(たとえばデザインサーベイとその成果の展示、二〇世紀初頭の工学技術の研究など)

④カナダの人々との交流の場としてのカルチャーセンター

⑤サマースクール利用さらに大川理事長によれば、「将来、宮代町とクロウズネストパスの交流の一助にもしたい」ともいう。

なお所在地には、大きなスパー、レストラン、病院等もあり、日常生活には全く支障がないとか。

いづれにしても、学園の本格的な海外研修所のオープンが待ち遠しい。



祝詞を受ける大川先生夫妻

大川先生を励ます会が 盛大に催される

さる四月十二日、東京市ケ谷の私学会館ホールにおいて、第五代学長としてご活躍された「大川陽康先生に感謝し、激励する会」が、会、工友会、宮代会のメンバー約三百人。宴は、まず

発起人を代表して神馬敬学長が祝辞。次いで開学時に教授の任にあった小高寿夫先生(機械工学科)や竹内淳彦(図書館長)および大久保勝弘(電気電子工学科主任)両教授らが思い出ばなを披露したが、大川先生のご人徳と花の季節にふさわしい、たいへん和やかな会であった。

TOWN & CAMPUS

ゴミ処理に協力を!

宮代町からのお願いの一つにゴミの問題があります。とくに、はじめて下宿・アパート等の一人住まいを始める新入生はゴミの始末を町のルールに則り処理してください。宮代町は全国でもゴミ分別・収集について先進的な取り組みを行っているところです。大学構内も同様ですが、是非協力して下さい。

「機械工学教育」の 在り方を参観



今回の来日は、台湾の教育機関が機械業界に供給できる技術者養成方法の改善に資するため、日本の職業技術教育体系の現状と教育界が業界の需要にどのように対応しているかを考察すること。本学においては、機械工学科及び電気電子工学科での教育方法、特に工業高校からの入学制度及び工業高校からの入学者が学部及び大学院教育までの一貫性のある工業教育をどのように受けているか、さらにその卒業生を業界の需要に応えて供給できるかについて視察することにあつた。

機械工学科実験研究棟 新築工事の概要決まる

本年度末ごろに竣工の予定

本学では本年度、機械工学科の実験研究棟を新築する工事を計画し、ほぼその概要がまとまったので、ここに報告する。

建設場所は、応用力学実験研究棟、金属材料研究棟、溶接工学実験研究棟、機械要素実験研究棟、ボイラー・管轄棟の既設実験研究棟群を取り壊し、本館3号館と道を挟んで平行に新築を建設する。

延床面積は鉄骨構造約一〇、四〇〇㎡で、二階建と三階建を連結したような建物となる。天神門に近い三階建の方は、一、二階に機械工作センターを移動、その三階は製図室とCAD室となる。また、二階建の方は、取り壊した研究室、実験室、ゼミ室、会議室等となる予定である。

工期は、建設準備として、四月中旬から引越しを始める(引越し先は、W1棟、W2棟、E30棟)旧実験研究棟群を取り壊した後、六月中旬から着工し、来年度末頃の竣工を目指している。

詳細については次号以降に報告をしていく。

「任命」

◆神馬 敬学長
工業教育研究所長兼務

◆酒井 茂紀教授
機械工作センター長

◆樺澤 康夫教授
情報技術センター長

◆石田 実教育技術員
機械工作センター主任

◆鈴木 正
総務部施設管理課主任

◆星野 坦之教授(システム工学科) / 出張先中国(4/16↓4/24) / 目的 I I S M E T A 96 国際シンポジウムにて論文発表

◆伊藤 庸一教授(建築学) / 出張先韓国(4/18↓4/22) / 目的 韓国・慶尚南道の民衆空間調査報告及び民族建築調査

◆村川 正夫教授(機械工学科) / 出張先アメリカ(4/20↓4/29) / 目的 I I C

編集後記

五月の連休が終わり、これから前期試験と夏季休暇開始まで、落ち着いた活動に熱中できる時期になりました。新入生については例年感じることですが、この連休が明けると、いかにも大学生らしくなっています。友達とのつき合いも同様、同県に限定されていたものが、全国に広がり、大変スムーズにいったいと感じます。新入生諸君は特にこの五月が四年間を決める大切な時期であることを肝に銘じて努力して下さい。

◆本号は第一面に本学の大プロジェクトであるネパール仏教僧院修復完成について報告しています。本学はこのように、国内に止まらず、真の国際交流を通じて国際社会に貢献をしていることを知ってもらいたいと思います。(E)

近事片々

私は九年前に大学院の電気工学専攻を修了しました。高校から大学院までの通算した学生生活と社会人生活がやっと同じ長さになりました。大学時代の長閑な時の流れと比較すると季節の移ろいさえ気がつかずに夢中で過ごした九年間だったような気がします。



技術者という枠を 超えて事に当たる

大金 敏行
電気電子工学科 15期生

(株)エヌエフ回路設計ブロック勤務

要に迫られました。その甲斐があつて今では社内指導的役割を担う立場になっています。

学生時代、三度の飯より好きだった電子回路も生活の糧として毎日携わっている。帰宅後は電子回路関係の書物に触れる

は運びません。実社会で問題解決に取り組んだ場合には解答は必ずしも一つではなく複数の解答が用意されている場合が普通です。複数の個の選択肢から状況にあつたものを選択する能力、及び意思決定する決断力などが

ことです。そのせいか最近では、通勤途中の車窓から眺める多摩川周辺の景色の変化にも気がつくようになりました。

私はこの春で一応社内の各職場を一巡したことになります。技術畑で育った私が異なった業種を体験出来たことは大変良い経験でした。現在私はこれまでの実績を土台にして社内事務処理の効率化という業務に携わっています。事務部門の要求を完全に満たしたソフトを短時間で開発し当初の意思と一致して作動したときは何事にも替えがたい達成感で満ちあふれます。開発部門や製造と異なり間接的な部門で脚光を浴びる業務ではありませんが、間接部門の合理化が利益の増大をもたらすので、自分の能力を傾注しようと思っています。

今後は技術者という枠にとらわれず貪欲に色々な仕事に挑戦してみようと思っています。

OB便り

私は高校の頃から電子回路に興味をいだき日頃から電子技術に関する専門雑誌を愛読していました。この趣味は大学進学後も止みがたくしばしば秋葉原の電気街に足を運び電子部品を買いあさり色々な電子機器を作りました。先生方も電子回路

繰り返し廣瀬教授を悩ませた実にくつた学生だったような気がします。

入社後の私は連日深夜電子回路と格闘をして暮らすことになりました。さらに、業務を効率よく行うためにコンピュータ技術の応用が不可欠となり、本格的に勉強する必

気さへ起こらない今日の頃です。入社したての頃は趣味と仕事を結び付けた職場に就けたという満足感と自分の思い通りに仕事が出来るという期待で溢れていました。が、実際に職場に配属されて責任ある業務を任されてみるとなかなかうまく事

実社会では要求されています。産業界と大学とを比較してみれば、思い巡らせてみると自由で時の流れが緩やかだった学生時代に比べて、現代は思い巡らせてみることも出来ません。

最近の私の唯一の楽しみはカメラを片手に野山を散策して自然に触れる

さる四月八日、(社)東亜科学技術協力協会の以来により、台湾から「日本の一貫性のある機械工学教育」を考察する目的で、左記五名の方が本学を視察された。

頼 光哲 (大同工学院機械系教授)

施 國亮 (雲林技術学院機械系教授)

孫 明峰 (大同高級中学電子設備維護科主任)

派 隆吉 (大同工学院機械系副教授)

朱 居德 (中華映管彩色工程部総工程師)

今回の来日は、台湾の教育機関が機械業界に供給できる技術者養成方法の改善に資するため、日本の職業技術教育体系の現状と教育界が業界の需要にどのように対応しているかを考察すること。本学においては、機械工学科及び電気電子工学科での教育方法、特に工業高校からの入学制度及び工業高校からの入学者が学部及び大学院教育までの一貫性のある工業教育をどのように受けているか、さらにその卒業生を業界の需要に応えて供給できるかについて視察することにあつた。

当日は、学長、教務部長、柳沢章教授、大久保勝弘教授、村川正夫教授と長時間にわたる意見交換をし、左記の施設を視察した。

機械工作センター、C A D / C A M / C A E 演習棟、超高压放電研究センター、工業技術博物館。

さる四月八日、フレッド・オットー氏を団長とする国際ロータリー財団第6450地区研究グループ(アメリカ・シカゴ)より、十二名の方が来学された。

同グループの今回の来日目的は、日本の国際ロータリー第2770地区との研究グループ交換プログラムにより、約四週間の滞在中に日本の国民、政治、司法、教育、保健医療、産業、経



来学された人びと

国際ロータリー財団より来訪 学長らと懇談する

さる四月八日、フレッド・オットー氏を団長とする国際ロータリー財団第6450地区研究グループ(アメリカ・シカゴ)より、十二名の方が来学された。

同グループの今回の来日目的は、日本の国際ロータリー第2770地区との研究グループ交換プログラムにより、約四週間の滞在中に日本の国民、政治、司法、教育、保健医療、産業、経

「任命」

◆神馬 敬学長
工業教育研究所長兼務

◆酒井 茂紀教授
機械工作センター長

◆樺澤 康夫教授
情報技術センター長

◆石田 実教育技術員
機械工作センター主任

◆鈴木 正
総務部施設管理課主任

◆星野 坦之教授(システム工学科) / 出張先中国(4/16↓4/24) / 目的 I I S M E T A 96 国際シンポジウムにて論文発表

◆伊藤 庸一教授(建築学) / 出張先韓国(4/18↓4/22) / 目的 韓国・慶尚南道の民衆空間調査報告及び民族建築調査

◆村川 正夫教授(機械工学科) / 出張先アメリカ(4/20↓4/29) / 目的 I I C

五月の連休が終わり、これから前期試験と夏季休暇開始まで、落ち着いた活動に熱中できる時期になりました。新入生については例年感じることですが、この連休が明けると、いかにも大学生らしくなっています。友達とのつき合いも同様、同県に限定されていたものが、全国に広がり、大変スムーズにいったいと感じます。新入生諸君は特にこの五月が四年間を決める大切な時期であることを肝に銘じて努力して下さい。

◆本号は第一面に本学の大プロジェクトであるネパール仏教僧院修復完成について報告しています。本学はこのように、国内に止まらず、真の国際交流を通じて国際社会に貢献をしていることを知ってもらいたいと思います。(E)